

# “Burnt Norton” 分析

—— “the stillness of the turning world” に込められた  
創作意図を中心として——

永 田 節 子\*

## A Study of the Structure of T. S. Eliot’s “Burnt Norton”

Setsuko Nagata

**要旨**：T. S. エリオットは時と永遠との関係を追い求め、時に関する思索を“Burnt Norton”において深めようとした。本論ではエリオットの時と永遠に関する問題意識について、彼の最後の詩となる *Four Quartets* を構成する四部作の最初の作品“Burnt Norton”における語り手の思索を取り上げて具体的に分析をおこなった。語り手の薔薇園での一瞬の至福の経験は「回る世界の静止点」と喩えられるイメージを積み重ねることにより追求されていくことになるのである。

**Abstract** : In the first movement of “Burnt Norton,” the narrator follows the memory of his own past and that of mankind. He experiences a moment of bliss in the rose garden. This experience is both actual and revived in memory. It seems that he is surrounded by a grace of sense. Throughout the poem, the narrator tries to understand the meaning of this experience. The experience can be expressed only by the images that are compared to “the stillness of the turning world.” T. S. Eliot deepens his thinking about time and eternity by composing various images in “Burnt Norton.” Eliot’s attitude toward creation of poetry is reflected in the composition of the images.

**Key words** : 時 time 永遠 eternity バーントノートン Burnt Norton

### 序 論 本 論

T. S. エリオットの作品には、時と永遠、時間への関心が見られる。そこで本論では、彼の時間への関心が顕著にみられ、詩として最後の作品となった *Four Quartets* のなかの “Burnt Norton” を取り上げて、エリオットがどのように時間への問題意識を追求し描きだそうとしたかということ、具体的に作品分析をおこなうことでみていくことにしたい。

#### “Burnt Norton I”

“Burnt Norton” は 1935 年に創作され、はじめはこの作品だけで独立したものであったが、後に四編の作品からなる *Four Quartets* を構成する最初の詩としてあらたに出版されることになった。四編の作品とも地名が作品の題名となっており、“Burnt Norton” という詩はエリオットが 1934 年の夏にイギリスのグロースターシ

\*関西福祉科学大学 健康福祉学部 教授

ヤーにある庭園を訪れた時の経験を振り返り創作されたものであり、人間のこの世における日常の時間と永遠の時間についての思索が深められていくことになる。

Time present and time past  
 Are both perhaps in time future.  
 And time future contained in time past.  
 If all time is eternally present  
 All time is unredeemable.  
 What might have been is an abstraction  
 Remaining a perpetual possibility  
 Only in a world of speculation.  
 What might have been and what has been  
 Point to one end, which is always present.  
 Footfalls echo in the memory  
 Down the passage which we did not take  
 Towards the door we never opened  
 Into the rose-garden. My words echo  
 Thus, in your mind.  
     But to what purpose  
 Disturbing the dust on a bowl of rose-leaves  
 I do not know.

これは、T. S. エリオットの作品 *Four Quartets* を構成する最初の詩 “Burnt Norton I” の最初の詩句の引用である。この詩において、語り手は「時」に関する瞑想にふけり、まず時に関する抽象的な思索から始めた後、具体的なイメージでその思索を深めようとするのである。“Burnt Norton I” において、語り手は読者をも含んだ誰という限定のない「あなた」と一緒に薔薇園へと続く道を歩みはじめる。そして、語り手は自身の記憶をたどるのであるが、ここでたどられる記憶というのは、語り手個人の記憶であるとともに人類の記憶でもある。語り手が記憶をたどる試みは彼の以前の詩、“Marina” や *Ash Wednesday* でもすでに行われているので、“Burnt Norton I” の詩句をこれらの作品から照らしだして試みることにしたい。

“Burnt Norton I” の詩句の中の「あり得たかもしれないなかったこと」に関して、“Marina” という作品が参考になる。“Marina” という作品において、語り手は夢の中で出会うことになるマリナーナという存在とは一体何なのかということ、また出会いの場の海の風景とは一体どのような意味を持っているのかということを繰り返し自問する。“Marina” という詩は、語り手が夢の中でそれまでの経験を至福の瞬間の経験へと変容を起し得る可能性のある海とは何か、又その至福の瞬間の経験とは何か、又どのようにしてその経験が作り上げられていくのかということ自問し、思索を続けるという構造となっているのである。そして、“Marina” という作品において描かれていた語り手に至福の経験をもたらすことが可能となるように期待されている状況が、“Burnt Norton I” の薔薇園に響く笑い声や足音として描かれていくことなのである。「あり得たかもしれないなかったこと」というのは、思索の中でのみ可能性のある人類における楽園での経験や、過去の無垢な幼年期などに代表されるものなのである。

一方、“Marina” で描かれた七つの大罪や *Ash Wednesday* において聖灰水曜日の祈りとして悔い改めようとする現在までの経験というものには「あったこと」という罪深き経験にあてはめることができるのである。*Ash Wednesday* という作品でも、語り手はそれまでの罪を悔い改め、夢のなかで至福の一瞬の経験を追い求めるのである。

*Ash Wednesday* や “Marina” で、語り手が夢の中でこの二つの経験について思索を深めることによってあらたな至福の経験が生まれることを願っていることは、“Burnt Norton I” における「あり得たかもしれないなかったこと」と「あったこと」という経験が「一つの終わり」という新しい経験を指向するという詩句へと繋がっていくのである<sup>1)</sup>。

“Burnt Norton I” で「一つの終わり」とよばれる経験は、行ったことのない通路をたどり、

開けたことのない戸を開けて到達することのできる薔薇園での、池が一瞬光で満たされるといふ経験にたとえられることになる。語り手は「一体、何の為にばらの花びらに積った塵を払うのか」と、その新しい経験を求める行為を無駄なことではないかと自問を繰り返しながらも思考を続けるのである。“Burnt Norton I”という詩では、語り手の「私」が「あなた」という誰かとともに、薔薇園のなかで「時」についての瞑想にふけるという状況が描かれている。語り手は、日常の時間と薔薇園での永遠の時との関わりについての思索を続けざるを得ないのである。

語り手の「私」が薔薇園に入っていくと、木陰に子どもたちの笑い声が聞こえ、池が光で満たされる一瞬が現われ、永遠の時の世界が示される。しかしその光に満たされた池は一瞬にして消え失せ、続く詩句で人間はその世界に耐えられないと語られる。“Burnt Norton I”で語られている経験は、語り手個人の経験として描かれると同時に人類全体の経験として取り扱われており、語り手が通ったことのない通路を通して入る薔薇園の世界は、人類の始まりの楽園が重ねあわされて描かれている。

語り手は薔薇園の中を歩いているうちに自身の過去の記憶をたどることになるのであり、その記憶をたどるということは、幼年時代の至福の記憶をたどることでもあり、同時にまた人類の始まりの最初の楽園を思索のなかでたどろうとする試みでもある。つまり、この薔薇園でたどられる記憶というのは個人の記憶だけではなく、この詩は人類の記憶、歴史をたどるという試みがなされているのである。この詩において、日常という時間のなかに置かれた人間がいかにして「時」を克服し永遠に触れることができるかというテーマが取り扱われているが、エリオットの時間に関する思考の奥にキリスト教的世界観があり、その影響は“Burnt Norton”全体にわたってみられるのである。

ところで、この作品で取り上げられている人

間存在の根幹に関わる二種類の時間は、カイロスとクロノスの定義をあてはめて表現することができる。

クロノスが計量可能な物理的時間を意味するとしたら、カイロスはクロノスのような流れを断つ瞬間時としての質的時間である。P. ティリヒはこれを、永遠が実存に危機をもたらしつつ時間のなかに突入してくる卓越した瞬間とし、その瞬間は歴史のなかで期待され、熟してくると考える。「時は満ちて。神の国は近づけり」(マルコ福音書 1~15)の「時」とはこの意味でのカイロスにほかならず、決断すべき運命的な瞬間、機時であるといえよう。また、S. キルケゴールが永遠と時間を結ぶものとして指定した瞬間も、カイロスと呼びうるであろう<sup>2)</sup>。

“Burnt Norton”という作品において、語り手は人類の記憶をたどり、異なる種類の二つの時間について思索を繰り返すのであり、「クロノス」に相当する日常の時間のなかで、突然あらわれ一瞬にして消えてしまうような「カイロス」に相当する時間、瞬間との関わりをどのように捉えることができるかという試みがなされているのである。

“Burnt Norton”にみられる日常の時間のなかに永遠の時が交差する瞬間を待つという姿勢は、エリオットの評論『パスカルのパンセ』(1931年)のなかで、彼がキリスト教神学の考え方として述べている「人間の魂の救済の為には、個々の人間の努力および能力に存在する自由意思と、どのようにして与えられるのかはっきり分からないけれども、超自然の恩寵ということが必要とされる<sup>3)</sup>」という考え方と関係しているのである。

薔薇園で木陰に子どもたちの笑い声が聞こえ、池が光で満たされる一瞬が現われるが、その永遠の時の世界は一瞬にして消え失せる。けれども、人間には耐えられないその一瞬を捉えようとする試みは、“Burnt Norton II”以降にお

いても繰り返しおこなわれることになる。

### “Burnt Norton II”

“Burnt Norton I”で語り手が一瞬経験した至福の経験は、池が光で満たされるというイメージで描かれているが、“Burnt Norton II”では“Burnt Norton I”の至福の一瞬の経験は、動いていると同時に静止している車軸というイメージで表現されることになる。“Burnt Norton II”では動と静という二つの相反するものを一つにするイメージとして、車軸と星座のイメージが使われている。

“Burnt Norton II”は、車軸が泥に埋もれて、にんにくとサファイアがこびりついているという詩句“Garlic and sapphires in the mud/Clot the bedded axle-tree”から始まる。車輪の回転を妨げるもののイメージとして車軸にこびりつくにんにくとサファイアが使われているのであるが、にんにくとサファイアは人間の罪を暗示している<sup>4)</sup>。このようなエリオットのキリスト教に傾く思考は、“Burnt Norton I”で薔薇園の至福の時が人類の歴史の最初の楽園（first world）と重ね合わされて描かれていることや、“Burnt Norton I”以前の作品“Marina”などにもみられる。

次に、回り続けるもののイメージとして、人間の血液、リンパ液、星座が挙げられており、人体と星座、人間と宇宙との対比、マイクロコズムとマイクロコズムとの照応がおこなわれている。マイクロコズムとマイクロコズムの照応を取り上げる手法は17世紀の形而上詩人のダンやマーベルがよく行った手法であるが、対立概念の調和、小宇宙と大宇宙との調和が取り上げられるのである。

Below, the boarhound and the boar  
Pursue their pattern as before  
But reconciled among the stars.

星座のなかで逃げる猪と追いかける獵犬とい

うイメージは、逃げると追いかけるという動きが示されているものの、その両者の置かれた状況は星座のなかでは永遠に変わることはないの、その両者は動いておりながらも静止しているという状況を示す動と静とが一つとなったイメージとして取り上げられているのである。このように“Burnt Norton II”では、動と静との相反するイメージによって宇宙の調和が描かれている。そしてこのように車軸や星座のイメージによって示される状況は、「回る世界の静止点」(‘the still point of the turning world’)という言葉で語られることになる。“Burnt Norton I”で語り手が薔薇園で経験した池が光で満たされる一瞬の至福の経験は、“Burnt Norton II”でこのように動と静を一つとして調和をつくりあげる「回る世界の静止点」というイメージで説明され、作品は展開していくことになる。

「回る世界の静止点」という表現で語られるものは、“Burnt Norton I”で語り手がすでに経験したけれども説明することができない経験のことであり、確かに私たちはそこにいたのだけれど、どこにいたのだという説明ができない一瞬の至福の経験、通常とは異なる時間の経験を表現するものである。そして、その一瞬の経験は恩寵というものにでも包まれた感覚であると説明されることになるが、このような詩句にもエリオットの評論『パスカルのパンセ』にみられるようなキリスト教的な考え方がうかがえるのである。

“Burnt Norton II”の最後で、語り手による時に関する考察がおこなわれる。つまり、人間は時に支配された存在であるので、時の中から抜け出すことはできないものの、時を超える一瞬の経験を求めるものであるということが語られる。そして、この一瞬は“Burnt Norton I”の薔薇園の一瞬に相当し時間のなかに存在するものである、“Burnt Norton II”の結びの詩句は「時はただ時によってのみ克服される。」(Only through time time is conquered.)ということになり、語り手は過去と未来の時間について思い

をめぐらすことになる。このような過去と未来の時間についての思考は、“Burnt Norton III”で取り上げられることになるのである。

### “Burnt Norton III”

“Burnt Norton III”では、人間が置かれた状況は、薄暗闇の光のなかで、過去の時と未来の時に別々に区分された時のなかにいると形容される。“Burnt Norton I”で語り手の経験した至福の一瞬というのは過去、現在、未来の時間が出会って一つとなる時間であると語られており、“Burnt Norton III”は“Burnt Norton I”と対照的な世界として描かれているのである。

Here is a place of disaffection  
Time before and time after  
In a dim light : . . .

“Burnt Norton III”は、時のなかに置かれている人間の状況が、地下鉄のちらちらと光が点滅する薄暗闇の世界に喩えられ、“Burnt Norton I”の薔薇園の池を満たす光に包まれる世界と対照的な世界として描き出されている。その薄暗闇の世界は“Burnt Norton I”で描き出された至福の一瞬とは全く異なる状況であることは、人間が紙屑と同じように「時の前」(time before)と「時の後」(time after)を吹く冷たい風に吹かれていると表現されるのであり、至福の一瞬が生まれる可能性がない状況を「過去の時」(time past)と「未来の時」(time future)とが切り離されている状況として説明されるのである。このように“Burnt Norton III”では、言い回しを変えつつ繰り返し何度も、過去と未来の時がばらばらになっている世界、人間が置かれている救いのない状況が強調されている。

そして、人間がおかれた薄暗闇の世界としてロンドンやロンドン近郊の地名が羅列された後、本当の暗闇 (darkness) はこのような場所ではないと語られ、薄暗闇の世界とも光溢れる世界とも異なる世界が提示されることになる。

そして、人間は薄暗闇の世界から抜け出して、暗闇の世界を経験することが必要であると語られることになる。

“Burnt Norton III”で薄暗闇の世界から暗闇の世界へと降りていかなければならないと語られる際に、十字架の聖ヨハネの『靈魂の暗夜』が引用され、この世の感覚の喜びから離れて魂の世界へと降りていく<sup>5)</sup>ことの必要性が語られるのであり、この方法によって人間が薄暗闇の状況を抜け出すことができるのだということが示唆されるのである。*Four Quartets*のエピグラフで「上への道も下への道も同じ一つのものだ。」と書かれていたとおり、“Burnt Norton III”では下への道が、上への道となることが示されるのである。

### “Burnt Norton IV”

“Burnt Norton IV”は庭園のなかの植物、花、鳥など自然の世界がとりあげられ、太陽が消えてしまった後の庭園で、カワセミの翼が光を受けその光を反射して作られた光に満たされる情景が描かれる。このように光が光を照り返す一瞬、庭園での光に包まれる瞬間は“Burnt Norton I”の薔薇園の池が光で満たされる瞬間と同様の一瞬であり、「回る世界の静止点」を暗示しているのである。

. . . After the kingfisher's wing  
Has answered light to light, and is silent, the  
light is still  
At the still point of the turning world.

“Burnt Norton IV”はこの作品が時をテーマとして取り上げていたことをあらためて提示するものであり、語り手の思索が時に関するものであるという“Burnt Norton”のテーマが再び示されることになる。

### “Burnt Norton V”

“Burnt Norton”という作品は時をテーマとし

て語り手の思索が深められていくのであるが、“Burnt Norton V”で語り手は詩人として、芸術家として時の問題に立ち向かおうとするのである。“Burnt Norton V”の冒頭の詩句は、時のなかにある言葉と音楽が時のなかにありつつ如何にして時を超えることができるかということ、動いていると同時に止まっているという「回る世界の静止点」というイメージを用いて説明をおこなうのである。

Words move, music moves  
 Only in time; but that which is only living  
 Can only die. Words, after speech, reach  
 Into the silence. Only by the form, the pattern,  
 Can words or music reach  
 The stillness, as a Chinese jar still  
 Moves perpetually in its stillness.

この詩句では、中国の壺に描かれた繰り返しの模様をパターンと呼び、永遠の時を成立させるには、言葉や音楽がそうであるように時のなかに存在してこそ時を超えることが可能になると語られる。つまり、壺のまわりを取り巻く壺に描かれた繰り返しの模様のパターンは、模様の一つ一つを取り上げてみると動きを表現しているものの、その模様全体としては一つの静止した形を作っているのである。このような中国の壺の模様として取り上げられている動と静とを兼ね備えたパターンと語られるものは、“Burnt Norton”で描かれている「回る世界の静止点」、薔薇園の瞬間の経験、日常の繰り返しの時のなかに存在しつつ日常の時を超えること、つまりエリオットの時に関する思索と深く関係しているのである。エリオットは“Burnt Norton”という作品を創作する際に、日常の言葉で世界を描きだすと同時に、その作品が時を超えた永遠の世界を描き出すことが可能になるように、「パターン」を意識し、パターンに基づくイメージを構築していくのである。

この「パターン」という考え方はエリオットにとって重要であり、彼は『ジョン・マーストン論』という評論で、パターンという言葉を使って、ふと現実から離れた日常世界の背後に、まれな瞬間にだけ現れる日常の時間とは異なる瞬間があるということを指摘している<sup>6)</sup>。彼の1934年の評論『ジョン・マーストン論』と1935年に出版された“Burnt Norton”の創作は時期的にも重なっており、評論でパターンという言葉で語られる、日常世界の奥に日常とは異なる世界があるという考え方は、“Burnt Norton”を創作したエリオットの思索にもみられるのである。

ただ“Burnt Norton”では、エリオットの考えるパターンはキリスト教的な傾向が強くなっている。このことは“Burnt Norton V”において、言葉が時のなかにありつつ時を超える状況を妨げるものの要因を、荒野でキリストが会った悪魔の誘惑にたとえることにもみられるのである。更に“Burnt Norton V”では、パターンという考え方に十字架の聖ヨハネの『靈魂の暗夜』の人間が神の愛へと近づいていく十の階段が取り入れられている<sup>7)</sup>。そして、日常の時間と永遠の時間との対比についての思索は、動(人間の欲望)と静(神の愛)とを兼ね備えたパターン、つまり、キリスト教的な考え方が組み込まれたパターンを作り上げるという工夫がなされているのである。

さて、時間意識がテーマとして取り上げられている作品である“Burnt Norton”は、“Burnt Norton V”の最後において、次の詩句で締めくくられることになる。

Sudden in a shaft of sunlight  
 Even while the dust moves  
 There rises the hidden laughter  
 Of children in the foliage  
 Quick now, here, now, always-  
 Ridiculous the waste sad time  
 Stretching before and after.

“Burnt Norton V”の最後の詩句では、“Burnt Norton I”で描かれていた突然の日の光、子供たちの笑い声、永遠の時へと誘う鳥の声が再び提示されるものの、この詩句の直後に“Burnt Norton”全体を締めくくる言葉として、このような世界とは対照的な果てしなく続く日常の時間が Ridiculous the waste sad time/Stretching before and after. という詩句によって、読者に突きつけられることになる。語り手はこのような日常の時間と、その日常の時間の背後にあるはずの永遠の時との関係について解決を見出せないで、引続き思索を続けざるをえないのである。

### 結 論

エリオットは作品の中でイメージを積み重ねるという手法をとることにより、日常の時間とその日常の奥にある時間、時と永遠との関係を追い求め、模索するのである。“Burnt Norton I”から“Burnt Norton V”まで一貫して追い求められるイメージは、「回る世界の静止点」つまり、動いていて同時に止まっているという動と静とをともに備えたイメージである。そして、エリオットが時と永遠との問題を取り上げる際に、“Burnt Norton”にはキリスト教と切り離すことができないイメージが組み込まれているのである。

本論ではエリオットの時と永遠に関する問題意識を、彼の最後の詩集となる *Four Quartets* を構成する四部作の最初の作品“Burnt Norton”における語り手の思索を取り上げて具体的に分析してきた。そして、エリオットが、彼の評論『ジョン・マーストン論』で述べているパターンという考え方に基づき、どのようなイメージを作り上げて“Burnt Norton”を構成しようとしたかということを検討してきた。

ここであらためて振り返ってみるならば、“Burnt Norton I”では日常の時間の背後にある薔薇園の池に光あふれる一瞬の至福の時間について、“Burnt Norton II”では車軸や星座の動いていると同時に止まっているというイメージで

示される「回る世界の静止点」について、“Burnt Norton III”では人間が存在する薄暗闇の日常の時間の世界について、“Burnt Norton IV”ではカワセミの翼が光を光で反射する光溢れる至福の瞬間の世界について、“Burnt Norton V”ではこの世の日常の時間と時のなかにありつつその日常を超える永遠の時について取り上げ、エリオットがどのように時に関する思索をこの作品において深めようとしたかということについて考察をおこなった。そして、様々なイメージで“Burnt Norton”という作品を構成することにより、エリオットが時に関する思索を深めようとした試みを分析した。このようなエリオットの時に関する問題意識は彼の創作にとって大きな意味を持つのであり、彼はこの後も *Four Quartets* を構成する四部作の創作活動をおこなうことにより思考を深めていくことになるのである。

### 注

詩の引用はすべて T. S. Eliot, *Collected poems* 1909–1962, (London: Faber and Faber Ltd., 1974) による。

- 1) 永田節子 *Ash Wednesday*, “Marina” から “Burnt Norton” 1 へ – Under sleep, where all the waters meet/The forms reform” – 『英米文学』第 40 巻第 1 号 関西学院大学英米文学会 1995 年 23–24 頁。
- 2) 岡野和則編 *ブリタニカ国際大百科事典* ブリタニカ・ジャパン株式会社 2005 年。
- 3) T. S. Eliot, “The *Pensees* of Pascal,” in *Selected Essays* (London: Faber and Faber Ltd., 1932), p.413.
- 4) Grover Smith, *T. S. Eliot’s Poetry and Plays: A Study in Sources and Meaning* (Chicago: The University of Chicago Press, 1950), p.261.
- 5) Peter Milward, *A Commentary on T. S. Eliot’s Four Quartets* (Tokyo: The Hokuseido Press, 1968), p.45.
- 6) T. S. Eliot, *Selected Essays* (London: Faber and Faber Ltd., 1932), p.232.
- 7) Peter Milward, *A Commentary on T. S. Eliot’s Four Quartets*, p.63.